
東方非想ZUN則

点愚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方非想ZUN則

【Nコード】

N01020

【作者名】

点愚

【あらすじ】

東方Project二次創作。
怠惰で夢想家な店主を愛して。

東の方の、怠惰で夢想家な店主と彼女達の物語。

…を気味の悪い妄想で書いた作品です。

基本的に彼女達は店主に：な作品なので、気分を激しく害される方がいると思います。

そんな方は、こんな物より素晴らしい作品を見に行つて下さい。それでも読んで下さる方は、私の文章力に難ありますので、お氣をつけて。

ネタバレ含む所もあります。さらに、原作崩壊当たり前。誰ですか？この人な部分ばかりです。

基本的に一話完結？の体裁を取っていると思います。一応各話独立していて、最後にリフレインしたりしないと思います。

多分続く内に、無茶くちやになると思います。その時はその朱鷺で。

…注意はしましたよ？

1話 雨と思考と鍋敷き

雨粒が屋根を叩き、不規則で弱々しくも、優しい音色を生み出す。

こんな日は、本の世界に浸かるべきだろう。

昔から晴耕雨読、というように。

まあ、晴れでも本は読むが。

先程注いだ茶を啜る。

程よく冷めたそれは、絡みがちな思考をほぐしてくれる。

本とは情報。その情報を自ら考察して初めて知識となる。

考察のない情報は只の情報ではない。

食物の様に、咀嚼することで消化しやすくなり、自らの血肉となる。

考察とは、咀嚼し消化することと言える。

故に、読書の際思考が絡み、止まってしまうことは、最も避けるべき事である。

消化しなければ血肉にならない。

ただの無意味な行為に終わる。

それでは本が死んでしまう。

道具とは用途から外れてしまえば、ただのゴミに成り下がってしまう。

それは道具に対する冒涇以外の何物でもない。
そんなことは許されては行けない。

読みもしないのに、価値があるというだけで、死ぬまで借りて行き、鍋敷きにつかうなど言語道断である。

決してお気に入りの本を持ってかれて、見事に表紙が目もあてられぬ事になったことを言っているわけではない。

あくまで道具、本に対する心構えを言っている。

…あの本は表紙の彩りも素晴らしかったのに。

ともかく、いずれあの娘にはキツく言わなければ行けない。

…聞く耳があるかは分からないが。

すっかり冷えきった茶を飲み干して、茶を注ぐ。

湯飲みから伝わる熱が心地よい。

気付けば、雨は強さを増し寒さもついでに増していた。

長く椅子に座って居たせいか、立つと体の節々が小気味よい音をならす。

一際大きく伸びをし、ストーブの元に向かう。

外の世界の道具だが、大変に便利だ。

もつとも、使い続けるための障害がとても厳しいが、寒さには勝て

ない。

ストーブに火を入れ、またいつもの場所に座る。

ゆらゆらと燃えるストーブを眺める。

流石に徹夜で本を読んでいたせいか、店内がじんわり暖まってきた、自然と瞼が重くなる。

このまま、瞼を閉じてしまっても良いか。

ぼやける思考の中、なんとか栞を挟む。

とりあえず、眠るか

僕の意識はそこで落ちた。

2話 星の御面のさな蛙

なぜこの足は、あそこへ向かうのだろう。

しかも、こんな雨の中。

ご主人の捜し物も、寺の買い出しもないのに。

たしかに、あそこは面白い場所ではある。

見たこともない道具が並び、それらしい雰囲気醸す店。

道具に興味がある奴には、いてもあきない場所だ。

だが、わざわざこんな雨の中出向く所では無かったはずだ。

用事でいくなら、割と乗り気にいけるといつくらいだ。

だが、今の私には用事もない。

日々の習慣だろうか。

最近は何かにつけてあそこへ行かされていたから、行かなければ落ち着かないのだろうか。

わからない。

そもそもあそこは道具だけなら問題はない。
だが、その店主に問題が大有りなのだ。

あそこの店主は、基本的に怠惰というか、なぜ店を開いているのか疑問に思う。

客が来たのに、全てが無愛想な対応。

本から顔を上げずに客を出迎える店主がいるだろうか。

さらに気に食わないのが、初めてあそこを訪れた時の店主の対応だ。

私が欲しいものが宝塔と聞いて、商売のチャンスと思ったのだろう、急に愛想のいい態度に変えてきた。

最初からあの態度だったらまだ許せるが、宝塔の価値と私の状況を知った上だとね。

お著繰られているとしか考えられない。

こちらも賢将で毘沙門天の使いだ、馬鹿みたいにお著繰られているわけにも行かない。

しかし、私が色々言っても奴は見事に返して来た。

あんなに怠惰でいけすかない奴に、しっかりとした知識があるから、余計に悔しい。

結局は奴の言い値で買ったが、あんなに私と対等以上に論議した奴は初めてだ。

本来なら喜ばしいが、あんな怠惰店主と同等と思うだけで、胸が騒つく。

あの時は気苦労が多くて、「何やら顔つきが変わりましたね。何かあったのですか？」

なんてご主人に言われてしまったし。

それだけあの店主の相手はつらいのだ。

初めての来店からそんな有様だったし、二回目からはもっと酷い。

勝手に長々と喋りだすし、聞かなければ拗ねるし。

拗ねたら今度は接客が悪くなるし、仕方なく聞いてやれば子供みたいに楽しそうにまた喋りだすし。

本当に分かん店主なのだ、アイツは。

それをご主人達に愚痴っても、私の誇張と思うのか、微笑みを浮かべて聞くだけだ。

…さらにあの店主は魔女と巫女にやたらと甘い。

あの二人の我が儘をなんだかんだで聞いている。それが私と商談中にも関わらずだ。

店主として、客を優先すべきだろうに！と私は思うね。

本当に度しがたい店主だ。

愛想がないし、無駄話は長いし、足元見るし、魔女と巫女には甘い。

その癖普段の無愛想からは想像できないくらい、表情が変わるし、知識はちゃんとあるし、不器用だがたまに優しいし、不思議と居心地が良いと感じてしまう。

問題が大有りだ。

それなのに、

何故私は、あんな店主がいる店に行くのだろう。

何故私は、この古ぼけたドアを開けるのに時間がかかるのだろう。

なぜこんなにも気分が揺れるのだろう。

なぜこんなにも満ちるのだろう。

なぜこんなに、心臓が早いのだろう。

「星、あの娘を見ませんでしたか？」

襖が開き、聖が顔を出す。

「彼女はいつもの所に行きましたよ、聖。」
微笑えましいじゃないですか、と付け加える。

「ふふつ、彼女も大変ね。」

本当に優しく、聖は微笑む。

「彼女は自分の中は探せないようですね。今の自分の気持ちが何なのか、見つけられないようです。」
と、小さなダウザーを想い、私も微笑む。

「彼女なら、きっと自分の気持ちを探し当ててでしょう。彼女も妖怪である前に、女の子なのだから。」

見つけてから、彼女はこうするのだろうか。

駆け引きは彼女の得意分野だが、果たして、それが活かされるのか。

毘沙門天代理は魔法の森の方向を見ながら、彼女に頼む、次のお使いを考えていた。

2話 星の御面のさな蛙（後書き）

まずはダウザーです。

鈍いナズーと鋭いucciかりさん。

1面と5面の立ち絵の違いと、サブタイトルの場面の会話と、気持ち悪い妄想が材料です。

お口に会えば幸いです。

3話 ロード制約（前書き）

何を書いているのやら。

きっと私も足下がお留守。

3話 ロード制約

ただ必死に頑張った。

闇雲に、もがいた。

いつかは、そうよばれることを夢見て。

けど、それが只の空回りになったのはいつからだろう。

師の教えもなく、上ばかりを見て走っていたのだ。
足下がお留守になり、転んでしまうのは当然だ。

なお悪いのは、転んだ場所に目をやることもなく、なおさら上を見て走りだすことだった。

こんな所で転んでいては、上には行けない。もっと上を見て走らなければ

しかし自分ではそんな姿に気が付くはずなどない。
上を見ていれば、自分の姿など、見ることなどないから。

そうして上を見て走っているから、自分の失敗という石に躓いても、その石をなかったことにしようとする。
なぜ躓いたかも考えない。

ひたすら走る。

上を向いて。

しかし、何時までたっても少しも近づけない。

そんな時だ、あそこへ行ったのは。

待っていたのは、雪、理不尽、寒さ、雪、店主。

遠い上を見ながら走っていた私が、少しくらい上から落ちてきた雪に埋まるのだ。

その時点で、自分の走り方に問題があると気付けない我が身の未熟。

上ばかり見ていた私に、あの人は本当に酷い扱いをしてくれた。

だが、それが良かったのかも知れない。

あそこに行くたびに、転ばないように、足下を見る癖がついたのかもしれない。

その日から、少し足下を見ながら走るようになったと思う。

気が付けば、躓いた理由も、次に躓かない方法も考えるようになった。

その次には、躓いた時の対処も考え実行していた。

あの店では転べない。

そう思った切っ掛けは、あそこで転んだら、只ではすまないから。

転んだ先に、店主がさらに追い討ちをかけるのだ。
さすがな未熟でも、それは嫌だ。

だから、この人の前では転べない。怖いから。

そう思っていたのだが、それもいつしか変わって来た。

何が切っ掛けかはわからない。

褒めてくれる顔、心配してくれる顔。

叱る声に、優しい声。

つまらなそうな表情と、子供のように輝く笑顔。

きつと思いつく全てがそうなのだろう。

恋とは何が切っ掛けになるか、どうしてその人なのか、きちんと分かるような偽物の恋よ、と宴会で幽々子様が言っていた。

言われた時は、余り判らなかったが、今ならよくわかる。

…気がする。

いつの間にか、走る道が少し変わりつつある。

一人前を目指して走っていた筈が、あの人の横を目指して走っている。

でもあの人の横に立とうとするなら、一人前になってからだ。

だから今度は、しっかり足下を見ながら走ろう。

この道は険しく危険だから。

走るのは私一人じゃないから。

あの人の見てる所で転ぶのは、
恥ずかしいから

3話 ロード制約（後書き）

あの挿絵は反則。

店内のやり取りも反則。

ついでにここまで来てくれた人の器も反則。

4話 逢目不利

うーん、暇をつぶせる相手がいない。

只でさえ暇なのにこの雨では、何処にも行けないではないか。

空を睨んでも、返事は大量の水しか返ってこない。

溜息を飲み込むように、カップに口をつける。

今年の夏は、特に大きな騒動もなく、退屈だった。

毎年恒例の夏の異変は、私が出張するような物でなかったし。

まあ、去年もそうなのだが、一応顔見せ程度に関わった。

それ故に暇潰しになったからよかったのだが。

雨音が、耳に厳しい。

せめて、雨で無ければ。

退屈を潰しに外にも行けるのだが

もう一度空を睨む。

謝罪のつもりか水が多くなった。

嫌みなやつめ。

この調子では寝るまでずっと雨だろう。

本当に暇だ。

「何か暇潰しの話はないの？」

近くの眼鏡メイドに尋ねる。

このメイドが羨ましい。

小さなことでこんなにも楽しそうに居るのだから。

話を振っておいてなんだが、メイドの話は右から左へ聞き流す。

何か別の話が出るかと期待したが、結局は似た話だった。

まったく、従者が主人を不快にさせてどうする。

私はメイドが話すその内容が嫌いだ。

理由は簡単。

聞いてて不快になるからだ。

それだけ。

聞けば不快になる。

ただそれだけ。

細かい理由がわからないから、大きな理由で十分だ。

不快になる理由を、わざわざすくい上げるなど、馬鹿のやることだ。

「少し眠るから、もう下がっていい。」

そういうと、この従者は一礼し部屋を出ていった。

従者もいない部屋で、ベットに入る。

ふと思い出すのは従者の話。

私は、そんな一面を知らない。

そもそもそこに行くことが従者より少ないから仕方ないが、その事が余計に話を不快なものにする。

馬鹿か、私は。

不快な理由を考えるなど。

溜息を吐きながら思う。

あれと同じように溜息が板についた気がする。

何か言うと決まって溜息。

無茶な注文を聞いてくれるときも、店に入ったときも、白黒鼠のよ
うに膝に座ったときも、溜息。

本当に溜息だらけだ。

本当に、いつからなのか。
なぜこうなっているのか。

本当に、気が付けば

なぜこうもあそこへ足を向けたくなるのか。

…溜息一つ。

あれは今は何をしているのやら。

…二つ目。

雨が降っては冷やかしにも行けない。

…三つ。

明日、雨が上がったら行ってみよう。

…はあ。結局溜息。
我ながら情けない。

私は、暇を潰せる相手が店主しかいないのか。

4話 逢目不利（後書き）

逢う目が不利。

変化球です。

お嬢は恋煩い。

従者について。

時間を止めます。

冥土です

てんねんです。

しょうしゃです。

ね。

上の矢印の部分で気分を害される方もいると思いますが、抜き出してひらがなに直して調べれば、すこしホッコリできるかと思いま

す。

5話 バネ。

毎年夏には異変が起こる。

もはや幻想郷で暗黙のルール。

しかし、今年は私が異変と感じるものはなかった。

まあそのかわり、今も継続中の異変が起きている。

季節は秋だけど

雨降りの夜は寒い。

それが秋になると尚更。

程よい熱さのお湯を急須に入れる。

葉が開くまで少し待つ。

ここで焦ってはいけない。

急須を持ち、愛用の湯飲みに注ぐ。

寒いから、私は暖かいお茶を飲む。

冷えた手から始まり、口、喉、胃。

そして冷えた全身に熱が伝わる。

ああ、たったの一口で、こんなにも満ち足りた気分になれるから、寒い日のお茶は好きだ。

また一口お茶を啜り、ほうつと息を吐いた。

先程干した服が目に入り、早めに乾く事を祈る。

今日は、里に用事で行っていたのだが、帰ってくるときに風に煽られ傘が壊れてしまった。あのボロ傘め。

そのせいで、雨に打たれながら飛ぶ羽目になった。

当然着くところにはびしょ濡れ。

入るなり着替えて、ここに干している。

濡れた服から、乾いている服に着替えるだけで、暖かいと感ずるのは、少しおもしろいかも知れない。

新しい傘を用意しないとなあ、と思いながらお茶を啜る。

お茶づけが欲しい所だが、探してもないから仕方ない。

雨の音を聞きながら、ぼーっとしているのにも些か飽きた。

何が暇潰しになるものは

手近にあった本を取る。

適当にパラパラめくる。

挟んだ栞が落ちたが、後で拾うことにする。

内容はいまいちだが、雨音を聞きながらの読書は悪くないかも知れない。

と思う自分に微笑みたくなった。

暖かい空気のおかげで、実に快適だ。

先ほどまでの寒さはどこへやら。身も心も暖かい。

本当に、今は異変の真っ最中だとつくづく思う。

秋なのに、春のような陽気が私を包む。秋春異変でところかしら。

お茶の一杯でいつもよりぽかぽかするし、只の着替えでもぽかぽかする。…着替えはいつも思うからちよつと違うかな？

それに読書なんかしない私が、雨の日の読書を悪くないなんて思うとは。

そのことでさらにぽかぽか。

何をやってもぽかぽか暖かくなるから、この異変は好きだ。…ぽかぽか異変にしよう。

予定を決めても、何をするか考えても暖かい。

この異変は長く続いている。

いつまで続くのかは、いつもの勘でもさっぱり。

でも、少なくともこの場所にいる限りは、勘がなくても続くことがわかる。

そして原因だってわかっている。

この店だから、

この人がいるから、

私の秋春異変が起こる。…ぽかぽか異変は少々恥ずかしい。

お茶を一口啜る。湯呑みを新しく持ってこようかしら。

服をいじる。今回は着る服がないから仕方ないな、とか言いそうね。

栞を拾う。栞はどこに挟んであったかな？まあいいや。

ヤカンを取る。ストーブって便利ね。いつでも暖かいお茶が飲めるじゃない。

いつもの場所で、眠る店主を見る。私の春度が高くなる。

起きたら、何から話そうかな。

5話 バネ。(後書き)

ベネ。

春です。

秋だけと春です。

デイモートルトベネ。

6話 ふう…

鈍感はいけないわね、鈍感は。

先程から見ていたのに、気付かないなんて。
隙間から上半身だけ出し、今しがた寝入った店主を眺める。

外の道具を扱うこの店は、下手な妖怪よりも危険。
と言ってもここには電気も無いし、肝心の使い方だって分からないのだ。

昔のように、この店と店主を監視する意味もない。

要は監視という名目が欲しいだけ。

私にとって、幻想郷が全て。

維持の為にどんなこともやる、との噂があるが、火の無いところになんとかやら。

そんな噂や、私の力もあつて、今や大妖怪やら妖怪賢者とまで言われるようになるまで、あまり時間は掛からなかった。

私自身、その在り方を受け容れている。

大きな箱の中に、明確な仕切りが無くては混沌しか生まれない。

そのためには、仕切りを維持する者が必要。

その役割を担うためにも、その在り方は都合が良い。
故に私はそう在ってきた。

私を前にすれば、恐怖と絶望をもって接する。
その方が色々やりやすい。

…例外もいるが。

だから情けないことに、動揺した。

私が言った例外とは、あくまでも私と同等に近い力を持った連中だった。

だから、動揺してしまった。

こんな無防備で眠りこける、なんの力もない半妖に、大妖怪でも賢者でもなくも扱われたことに。

この店が開けられた時から、ここの存在は知っていた。

外の道具をも扱い、外の世界を夢想する店主は、危険だと容易に判断できた。

しかし彼も店も幻想郷の一部。

しかもなんの力もないのだ。

早々に潰すこともないと、傍観を決めた。

本当に危険な物を、理解して使う時がくればその時に消せばいいだけなのだから。

しかしこの店主は本当に、怠惰に夢想するだけだった。

晴読雨読で、野心はあるが、大繁盛という微笑ましいものだし、外の世界を知りながら、それに飲まれることもない。

非常に興味深い店主だった。

特にその知識。

まったく分からない外の道具を、自らの知識で解いていくのだ。

当然、外の物は外概念で存在する。しかしここにはその概念すらない。だからここで外の物を理解することは不可能。

だというのに、彼は自ら蓄積したここの概念全てを駆使して理解しようとする。

そして外概念を知るものからすれば、正気を疑う理論にも関わら

ず、見事に正解を導く。

その考察は、ずっと聞いても飽きないものだ。

在るべきままに在り、知識を高め、それを確かめる。

本当に、知識人だったのだ彼は。

そんな店主に、私も興味を引かれ、店を訪ねた。

まあ、たまにちよっかいはだしていたけど。

店に入るなり、私は愉快で仕方なかった。

恐怖と絶望以外の理由で、会ったことを後悔されたのは初めてだったから。

それは顔を合わせる度に、より顕著になっていった。

それも、知人としての範疇で。

本当に、彼には驚かされてばかりだ。

外の世界を知らながら、それでも飲まれず、しっかりと幻想を想う。

自らの知識で、本当に無から有を導きだせる。

野心家の癖に怠惰で。

理想的で達観しているのに、夢想家で子供のようで。
無愛想なのに、心の機微がすぐに顔に出て。

一介の半妖が、これほどまでに興味を引く存在とは、誰が思えるだろう。

大妖怪たる私に、孤独を気付かせるとは、彼には想像すらできないだろう。

妖怪賢者の私に、彼と過ごす時間が安らぎを与えているとは、本人は夢にも思わないだろう。

一介の半妖に、大妖怪や賢者と呼ばれる者が恋をするなど、誰が想像し得ただろう。

私自身、恋などするとは夢にも思わなかった。無論相手が一介の半妖など。

妖怪とは、精神に依存する生き物。

そして恋とは精神が無くてはあり得ない。

肉体に依存する人間ですら、恋には大きく左右される。

妖怪である私は、どうなるのだろっ。

不安もあるが、それ以上にこの満ち足りたものが、私を幸せな気持ちにさせてくれる。

未だ眠りこける店主の銀髪を撫でる。

今は閉じられている金の瞳は、これから何を映していくのか。

願わくばその光景を、寄り添って共に見ていきたい。

願わくばその瞳一杯に、私を映して欲しい。

恐らく、私は手遅れだ。

この想いになら、潰されても構わないと思ってしまっただから。

6話 ふう…（後書き）

賢者の時間です。

あの勝ち台詞は憂いているのでしょぅ。

店主に心のスキマを突かれました。

小さい頃に麻疹やってなくて、大人になってかかるとエライ目にあ
う感じ。

違うな。

閑話休題

体に吹き付ける風と、身をさす寒さに目を開ける。

確かストーブはつけたまま寝たはずだが、なぜこんなにも寒いのか。

寝惚けた目を擦る。

次第に晴れる視界は健気にも働くストーブを捉える。

どうやら頭も早く起こさなければいけないようだ。

店の番が無残にも倒れている、この状況を整理するために。

何回目だろうか、入り口の扉が吹き飛ばされるなど。

悲しいかな、慣れてしまった大工業のおかげで無事修復し、店内に入る風が止まり、寒さが和らいできた。

心なしか軽くなったヤカンから、急須へ湯を注ぐ。

茶を飲みながら、考える。

入り口付近の札、心なしが軽くなったヤカン、霊夢の湯呑み、干しである巫女服。

…霊夢か。

溜息と呆れしか出ない。

雨宿りをするなら、もっと落ち着いてほしいものだ。

案外早めに犯人が分かり、ツケ張を開く。

ああ、次のツケ張を用意しないと。

扉修理の手間代を気持ち高めに書き、閉じる。

色々動いたおかげで目が醒めた。

先程の本に手を伸ばし、続きを読む。

…この店では寝ている間に色々してくれるのは妖精でなく巫女によ

うだ。

僕の代わりに本まで読んでくれたようだ。

有り難すぎて涙が出る。

…今日は厄日のようだ。

7話 いつもの事と違う事

ガランガラン

久しぶりに仕事が出来て嬉しいのか、いつもより騒がしく音を鳴らす呼び鈴。

「入ってくるときは、もう少し静かに。」

ちらりと入り口を見やり、来訪者に言葉をかける。

来客ではないのが残念だ。

「服を取りに来たわ。乾いてるでしょう？」

そういうと彼女は勝手に奥まで入っていく。

やれやれ、と溜息一つ吐き、彼女の服を取りに行く。

丁寧に畳んだ巫女服を取って戻ると、彼女に渡す。

「まったく、雨宿りは仕方ないが、せめて店を壊さないように頼む

よ。」

椅子に座り、勝手にお茶を飲む霊夢に釘を刺す。

「悪いネズミを追いはらってあげたんだから、仕方ないのよ、それは。」

大した問題でもないように言い放つ。

「それは有難いが、せめて起こして行くなり、直すなりして欲しかったよ。」

「あんなに気持ち良さそうに寝ていたら、起こすのも気が引けるつものよ。」

ニヤリと笑いながら、煎餅をかじる。

「それに、ネズミを追いかけて回していたから直す暇なんて無かったわ。」

お茶のおかわりを僕にも勧めながら、彼女は言う。

「まあ流石に悪いと思ったから、こうして顔を見に来てあげたのよ。」

可愛らしく微笑むが、悪いと思うならツケを払って欲しい。

本当に勝手な巫女だ。

「君がここに来るのは、いつものことじゃないか。それを対価にさ

れてもね。」

溜息と共に吐き出す。

「…それもそうね。うん、いつもの事よね。」
と愉快そうに笑う。

「というわけで、ツケを払うなり買い物してくれてもいいんじゃないか？」

呆れながらいいやる。

まあ、それはないだろうが。

「それもいいかもね。」
と彼女は立ち上がる。

明日は槍でも降りそうだ。

彼女がまともに買い物しようなんて言うのだから。

「と言うわけで、何かお勧めの物はないかしら店主さん。」

本当に楽しそうに笑う彼女。

やれやれ、と立ち上がり彼女が好きそうな小物類を勧め始める

まったく、そんな顔をされたら、適当にあしらえないじゃないか。

7話 いつもの事と違う事（後書き）

結構すぐ調子狂うんだね。

仕方ないね。

8話 非魔月葡思

血のように紅いワインを、彼女に注いでもらうというのは中々考え
てしまうものがある。

お互いにグラスを掲げ、小さく乾杯。

細やかな宴が始まった。

余り飲む機会が無いが、ワインも中々悪くない。

静かに、落ち着いて飲めるものだ。

酒もそうだが、二人で静かに飲むのならワインだろう。

グラスに注がれる紅は、それだけで絵になる。

それも楽しむために、つぎあいをする相手が必要になる。

自ら注いでは、風情がない。

注がれる紅は、不思議と魅入ってしまう。

半分ある妖怪の部分がそうさせるのか。いや、生物としての部分が
何かを感じさせるのだろうか。

「知を追うのは良いが、礼を尊ぶのも忘れないで貰いたいね。」

「…すまない。」

はっと気付き、苦笑いを浮かべる。

はあ…。

こういう奴だと知ってるが、せめて今は目を向けて欲しいものだ。

グラスを傾け、味わう。

芳醇な香りが口内に広がり、鼻へと抜ける。

飲み干し、微かな酸味の余韻に浸る。

ワインを味わう為に、嗅覚も必要というのも頷ける。

また一口、味わう。

頭の中が静かになったのか、私との会話が成立し始めた。

ワインについて、その歴史や楽しみ方、さらに食べ物との組み合わせなど、話題は尽きない。

静かに粛々と続けられる宴。

騒がしい宴会も楽しいが、こちらもありだ。

グラスを傾け、会話を楽しむ。

月光の下、吸血鬼と飲むワインは、中々に感慨深い。

彼女は、多少やつかいだが上客である。

交流を深めても損はない。

暇潰しの為に色々おかしなことをやるが、長く生きる妖怪にとってはそれも普通である。

もつとも、店の近くでの弾幕は勘弁して欲しい。

槍が降って来たときはどうしようかと焦ってしまったし。

やや紅く染まった彼女を見やる。

ワインは染み抜きするのが大変らしいが。

スカーレットデビルの異名は伊達ではない、と言っているのか。

「レミリア。」

名を呼び、自分の首下を指で示す。

いまいち分からない彼女が、自分の服の同じ箇所を見る。

途端に、みるみる紅くなる。

本当に紅がついて回るものだ。

瞬きの間に着替えさせられた彼女を見ながら、ワインを一口。

紅い顔で、紅いワインを飲む、紅い館の主。

外見相応の反応が、今は微笑ましいものに感じる。

月を見上げ、ワインを飲み干す。

こんな夜も悪くない。

8話 非魔月葡思（後書き）

月夜に、悪魔っぽくないお嬢とワインを飲み、思考に浸かります。

お嬢はやつと暇が潰せました。

ちなみに槍を降らせたお詫びです。

酔ってるから、溢しても仕方ないね。

空気を読む従者は歪みねえな。

私の頭はだらしねえ。

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる（前書き）

この話だけは、完全に独立した番外編です。

もう完全に妄想。

そして空回りし過ぎてバターになりそう。

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる

紅く染まった山々も、夜の帳が降りて、ただ黒く。

欠けた月が、その黒に薄い青を塗り、秋の夜が姿を現す。

静かに草木を揺らす、物憂げな夜風が草木を撫でる。

生じた音に、虫たちが合わせて優雅な演奏となる。

静かで優雅で、物憂げな調べ。

静寂の縁側に、哀愁をも含んだ幻想の調べが届く。

静寂と哀愁の、秋の夜長。

天と杯には月が浮かび、輝く月と、揺れる月が静かに輝く。

杯を傾け、芳醇な香りと僅かな月の狂気を放つ酒を煽る。

喉を焼くような余韻が微かに残り、やがて消える。

耳と目と舌で、幻想の秋を味わう。

再度杯に酒を満たし、月を浮かべる。

波紋を伴い、儚く揺れる月は移ろうものの現れか

頭に浮かぶはあの娘達。

こうして、独り杯を煽っている間も、神社ではいつものように魔理沙が酒宴を開き、いつものように咲夜が料理をし、いつものように霊夢が呆れながらも楽しんで いたのだろう。

…時間の流れは止まらない。

そして、それに引かれて日々も変わって行く。

今は昔の幻想郷。

過ぎ去る日々と変わり行く日々。

見送る者は、前を向かされ進んでいく。

過ぎ去りし日々は、戻らない。

されど、日々の記憶は我が身と共に、明日へ向かう。

記憶が続く限り、彼方まで

気が付けば、用意した酒が最後の一杯。
胸中に浮かぶ、去りし日々。

杯を高々と挙げる。
精一杯届くように。

…月と、在りし日に…乾杯。

ゆっくりと、瞼が落ちてくる。

些か飲み過ぎたが、今日に限って吝かではないと思ってしまうのは、
半人の部分の提案か。

片付けは、明日でいい。
寝床も、ここで。

今は怠惰に、この『よい』と『幻想』の余韻を楽しみたい。

意識を手放し、夢を想う。

今は遠く、けれども色褪せないユメを

月夜の縁側に眠る、店主。

未だに彼は夢の中、過ぎ去りし日々を懐かしむ。

半人の彼は、多くの人を見送り、前を向いても過去を見る。

かの人達を忘れぬために。

半妖の彼は、多くの人を記憶し歩みを進める。

誰からも忘れられた、本当の幻想にしないために。

それが、見送る彼の手向け。
そしてかの人達との絆。

彼と共にある歴史書は絆の証。
彼との絆が記されたそれは、幻想のなかにあっても決して色褪せる
事無く在り続ける。

綴られた日々、綴られた人達は、それが有るかぎり、色褪せず、彼
と共に在り続ける。

遥か遠い、彼方まで。

秋のとある日とある場所

一冊の、古い歴史書が紐解かれる。

『幻想』に飲まれそうになりながら、しかし確かにその歴史を伝える歴史書が。

開かれたそれは、在りし日の姿を映し出す。

綴られた日々と人達を、何度でも

ユメを見よう。

確かに在った、

いつまでも色褪せない、

幻想のユメを

かくして幻想は世を包み、古き歴史は紐解かれる（後書き）

古い幻想を書き綴った、歴史書のお話。

店主と彼女達の日々が書き綴られた歴史書の、

諸般の事情に左右され続けた歴史書の、

待ち焦がれた歴史書のお話。

怠惰で夢想家な店主と、

素敵な巫女さんで紅白だったり、

普通で魔女っ娘で白黒だったり、

瀟洒なメイドでズレていたり、

胡散臭かったり、半人前だったりする人達との日々が綴られた、微笑ましい歴史書のお話。

あぁん？お客さん？（店の）

あんのかぁ？（代金を払うお客が。）

何気ない日々を綴った彼の歴史書は、歴史書というには余りにもお

粗末かも知れない。

けどそこには、『歴史』には見えない、確かに生きていた人達の、日々という歴史が、色褪せずに記録されている。

それらは、時がたつにつれて誰からも忘れられ、『幻想』に埋もれてしまいかもしれない。

でも店主と歴史書がひっそりと、力強くそれを掘り起こす。

半分人間であるが故に過去を懐かしみ、大切にする。

半分妖怪であるが故に、未来に進み、見送り続ける。

歴史書の記録を記憶とし、彼女達の日々は、店主と歴史書と共に在り続ける。

なんてね。

あの店主がそんなことするもんか。

あのひねくれが素直にそうするもんか。

でもするんです。

私が書いたから。

はい解決。

どういうことなの…

言わずもがなテンションMAX。

仕方ないね。

閑話休題 思入れ

深めに掘った穴に、丁寧に埋める。

外から、こちらに来てしまった故人を想い、手を合わせる。

せめて、安らかに。

暫く来てなかったせいか、供養する人の数が多く、いつの間にか太陽が、真上を越えてしまっていた。

まだ焦るような時間ではないが、早めに用事をすませることにした。

地面に目をやり、隈無く落ちているものを探しては拾って行く。

拾った道具を調べ、分別して、次の道具へ。

分別は、道具が使えるか、死んでいるかを見る。

使える物は腹部のポーチへ入れ、既に死んでしまった道具は一ヶ所に集め、後で供養する。

道具の死とは、道具が持つ用途が視えなくなった時と、使う人がいなくなった時だ。

前者は、どうしようも出来ないが、後者は違う。

道具は使われてこそ、その使命を全うできる。

まだ使える道具を、そのままに捨て置くなど、道具に対する冒涇ではない。

それは道具自らの使命、存在そのものを否定することになる。

そんな振舞いが許されては行けない。

だから、僕は道具を拾い、持ちかえる。

次の主を、僕の店で待ってもらうために。

粗方探し終え、遺体を火葬した所に戻る。

僕のここでの最後の仕事だ。

火葬の際に、燃烧の邪魔になるものをまとめた箱を覗き込む。

先ほどの通り分別を行い、供養するか持ちかえるか決める。

遺品を持ちかえるなど罰当たりだ、と憤慨する人は、僕から言えば、道具を想えない可哀想な人だ。

理由は先ほどの通り。

分別も進み、最後に煌びやかな腕時計が残った。

もう尋ねる人がいなくなっても、健気に時を刻む

この時計が、針を止めないのは、自身の使命を果たしたいと願っているからだ。

その願いを無下にするなど、僕には出来ない。

準備中の札を、商い中に変え店内に入る。
なんとか、日が暮れる前に戻ってこれた。

今日の成果を勘定台に乗せて行く。

『ポケットベル』 『天使のたまごっち』 『ファミスタ』 『ウォー』

クマン』『腕時計』：

今日は既に店に在る物が多いな。

少しの落胆と共に、それらを収納箱に入れた。

最後に拾った時計は丁度切れていたため、棚に並べる。

…一応綺麗にして、清めておくか。

時計の作業も終わった頃には、太陽も沈もうとしていた。

時計を棚に並べて、いつもの椅子に座る。

茶を入れて、飲む。

多少疲れた心身に、程よく染み渡る。

…結局、帰って来てから来客は無しか。
そして当然売り上げも無し。

まあ、道具には縁がついて回る。

変に焦っても、道具の縁を引き寄せるとは限らない。

腰を上げ、扉の札を準備中に変える。

今日はもう店仕舞いだ。

椅子に座り、本を広げる

仕入れに行った分、今日は余り本を読めなかったし、丁度いい。

店の方は、明日の縁に期待しよう。

秒針と頁が進み、秋の夜も更けていった。

閑話休題 思入れ（後書き）

思考を入れた仕入れの話。

入ったやろ

ん ん ん ん ん （否定）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0102o/>

東方非想ZUN則

2010年11月3日13時38分発行